海の道むなかた館
令和５年度館長講座
「筑紫・豊（前）の四つの窓」

令和５年４月８日(土)

海の道むなかた館長　西谷　正

第１回　Ⅰ.玄界灘・響灘（１）土笛（陶塤）の分布

Ⅰ　はじめに

土笛（陶塤）の発見

Ⅱ　土笛の研究史

・「陶塤について」（『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』）1997、峰山町教育委員会
・国分直一「呪術的造形および複葬の形跡」（『綾羅木郷遺跡発掘調査報告（本文編）』第Ⅰ集）1981、下関市教育委員会
・江川幸子「弥生の土笛」（『古代文化研究』第５号）1997、島根県古代文化センター
・東山喜一「弥生の土笛－その起源と変遷－」（『古事』【天理大学考古学研究室紀要】第４冊）2000、天理大学考古学研究室
・松永通明「土笛と把手付方形台付鉢について」『香葉遺跡第２地点－福岡県福津市福間南３丁目所在遺跡の調査－』(『福津市文化財調査報告書』第８集)2014

Ⅲ　土笛の分類と用途

Ⅳ　土笛の分布

Ⅴ　日本海沿岸交流の諸相

（１）　弥生文化―土器・鉄器・貝輪
（２）　外来形土器・中国貨幣
（３）　ジョッキ型容器
・橋本裕行「ジョッキ型容器の出現とその背景」（『東アジアの古代文化ニュース』No.579）2022、東アジアの古代文化を考える会

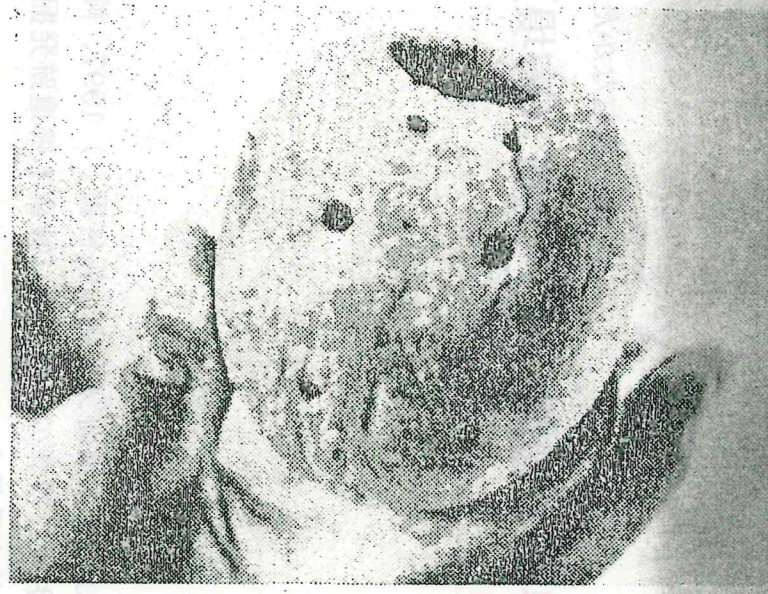
Ⅵ　おわりに

鐘崎海女の移動と枝村

（明治25年3月26日第3種郵便物認可・昭和　年2月17日四国郵政局特別承認新聞紙第117号）　西日本　1982.6.16

弥生の土笛が出土

九州で初めて 宗像市長尾遺跡



九州で初めて出土した弥生の土笛

〝農耕祭祀〟に使う

日本海沿いの交流実証

【宗像】稲作技術といっしょにわが国に伝来したと推定される農耕祭祀用の土笛が十五日までに、宗像市光岡、環濠集落跡の長尾遺跡で発掘された。弥生前紀末（紀元前一世紀）の製造とみられる。同種の土笛はこれまでに本州の四遺跡で十一個の発掘例があるが九州では初出土で、しかも最大級。北九州はわが国農耕文化の発祥地とみられ、土笛がほとんど日本海側で見つかっているだけに、稲作の波及をはじめ、弥生時代における日本海沿いの文化の交流を実証する貴重な発見と考古学界の注目を集めている。

この土笛は、全長九・六㌢、最大幅八㌢の夕マゴ型。中は空洞で厚さが一㌢前後もありズッシリと重い。最頂部に二・二㌢径の円形の吹き口があり、前面に五、六㍉径の穴が四個、二列の等間隔で並ぶ。このほか吹き口の周辺に四㍉径の穴が四個あるのが前例のない特徴で、首などにかけるためのつりひもの穴と推定される。

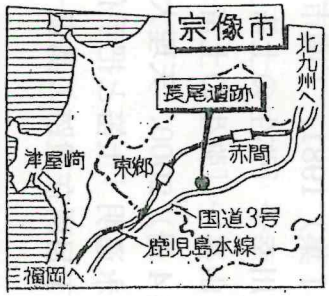
素焼きで材質は砂粒を含むきめ細かい粘土。黄褐色をしており、縦方向には磨いた跡があり、大事に使われていたことがわかる。その「弥生の音色」は低く柔らかい「ボーッ」という音が出る。

弥生前期の土笛は、昭和四十一年、下関市の綾羅木・郷台遺跡で初出土し、同遺跡の六点をはじめ、タデチョウ遺跡（島根県）扇谷、途中ケ丘両遺跡（京都府）で計十点が出土、ほかに弥生後期の小型のものが仲場遺跡（福岡県）で一点見つかっている。

土笛は中国の殷王朝（紀元前一七〇〇年―一一二二年）時代にすでに祭祀用に使われ、その後もずっと孔子廟の祭典で使用されてきたという。綾羅木・郷台遺跡の発掘にあたった国分直一・梅光女学院短大教授（民俗学、考古学）は、稲作技術とともに農耕祭祀もわが国に伝来し、土笛もこの祭祀の必需品として製法が伝わったと想定する。

しかも、弥生前紀の土笛は今回発掘例も含めすべて日本海側で出土していることから、発掘にあたった原俊一・宗像市教委主事（二九）は「日本海沿岸の文化伝ぱを土笛が裏付ける」と評価している。

長尾遺跡は、宗像市を走る国道3号沿いの標高三十二㍍の丘陵地にあり、周囲は昔ながらの穀倉地帯。宗像市教委が今年四月から第三次の緊急発掘調査を進めている。内径三十八㍍のほぼ円形のV字溝の中に四十七基の貯蔵穴が発掘され、集落の周りに溝を掘った環濠集落跡と推定される。土笛はこの遺跡の中央部北寄りにある弥生前期末の貯蔵穴（床の直径二・五㍍、深さ一・五㍍）の底面から四十㌢の高さの壁ぎわで横に埋もれた状態で見つかった。同遺跡からは土器、石器類数百点のほか、炭化米数十粒、どんぐりの実、獣骨も出ており、採取、狩猟、稲作混合の生活様式を示している。



国分直一・梅光女学院短大教授の話　宗像はわが国の農耕文化の発祥地・北九州文化圏に当たる。従って農耕祭祀用の土笛が発見されるのが当然だが、壊れやすいためこれまで発掘例がなかった。やっと発見されたわけで実に貴重だ。

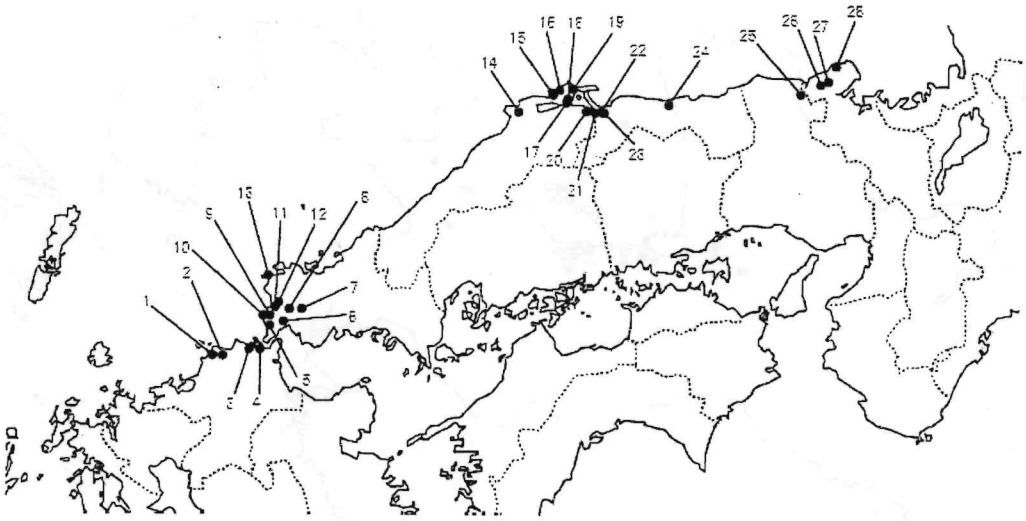


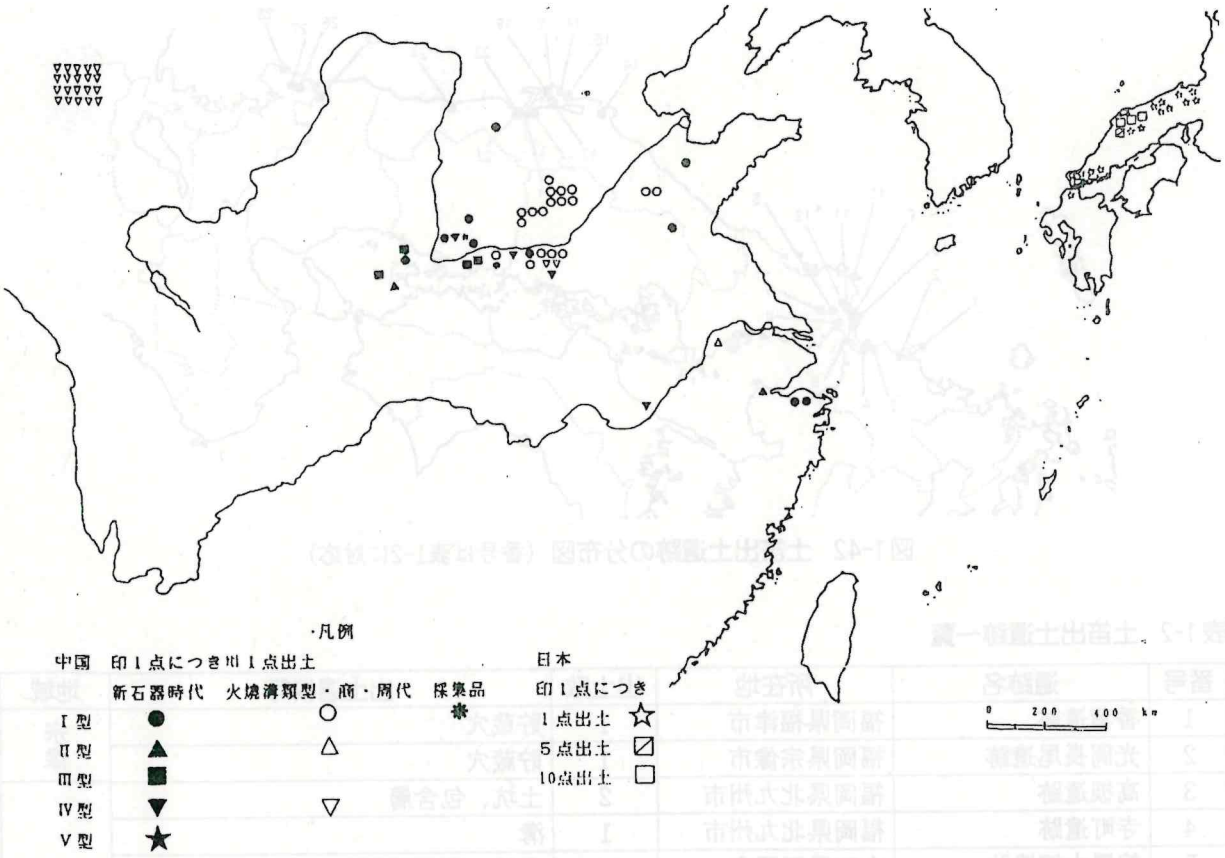
図1-42　土笛出土遺跡の分布図（番号は表1-2に対応）

表1-2　土笛出土遺跡一覧

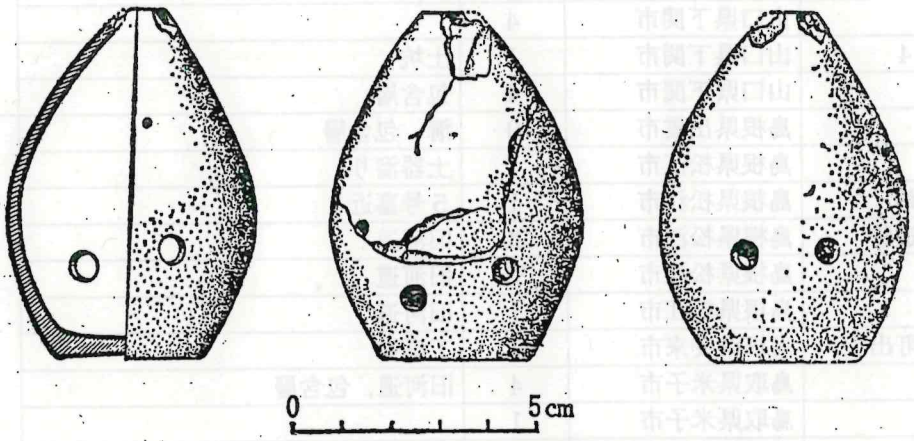
番号	遺跡名	所在地	出土数	出土遺構等	地域
1	香葉遺跡	福岡県福津市	1	貯蔵穴	宗像
2	光岡長尾遺跡	福岡県宗像市	1	貯蔵穴	
3	高槻遺跡	福岡県北九州市	2	土坑、包含層	関門
4	寺町遺跡	福岡県北九州市	1	溝	
5	綾羅木郷遺跡	山口県下関市	8	土坑、溝、貯蔵穴	
6	新張遺跡	山口県下関市	1		
7	下七見遺跡	山口県下関市	3	土坑	
8	山ノ口遺跡	山口県下関市	1	土坑	
9	大門遺跡	山口県下関市	1	土坑	
10	吉永遺跡	山口県下関市	5	土坑、溝	
11	高野遺跡	山口県下関市	4		
12	川棚条里跡４	山口県下関市	1	土坑	
13	沖田遺跡	山口県下関市	4	包含層	
14	矢野遺跡	島根県出雲市	9	溝、包含層	宍道湖・中海周辺
15	佐太前遺跡	島根県松江市	1	土器溜り	
16	堀部第１遺跡	島根県松江市	1	５号墓近く	
17	タテチョウ遺跡	島根県松江市	20	旧河道	
18	西川津遺跡	島根県松江市	31	旧河道	
19	夫手遺跡	島根県松江市	1	旧河道	
20	安来市九重町出土	島根県安来市	1	工事中	
21	目久美遺跡	鳥取県米子市	4	旧河道、包含層	
22	池ノ内遺跡	鳥取県米子市	1		
23	長砂第１遺跡	鳥取県米子市	2	旧河道	
24	青谷上寺地遺跡	鳥取県鳥取市	8	溝、包含層	鳥取市
25	川原遺跡	兵庫県豊岡市	1	旧河道	丹後半島周辺
26	扇谷遺跡	京都府京丹後市	1	溝	
27	途中ヶ丘遺跡	京都府京丹後市	3	溝	
28	竹野遺跡	京都府京丹後市	1	包含層	
		合計	118		
参考	原の辻遺跡	長崎県壱岐市	2	旧河道、溝状落ち込み、ココヤシ製	
参考	伊場遺跡	静岡県浜松市	1	溝、皮袋型土器？　土笛に含めず	

※図1-42、表1-2は松永通明『香葉遺跡第二地点』福津市文化財調査報告書第8集、福津市教育委員会、2014年、下関市立考古博物館『平成29年度特別展　遥かなる音の世界』（展示図録）、2017年を参考に作成。

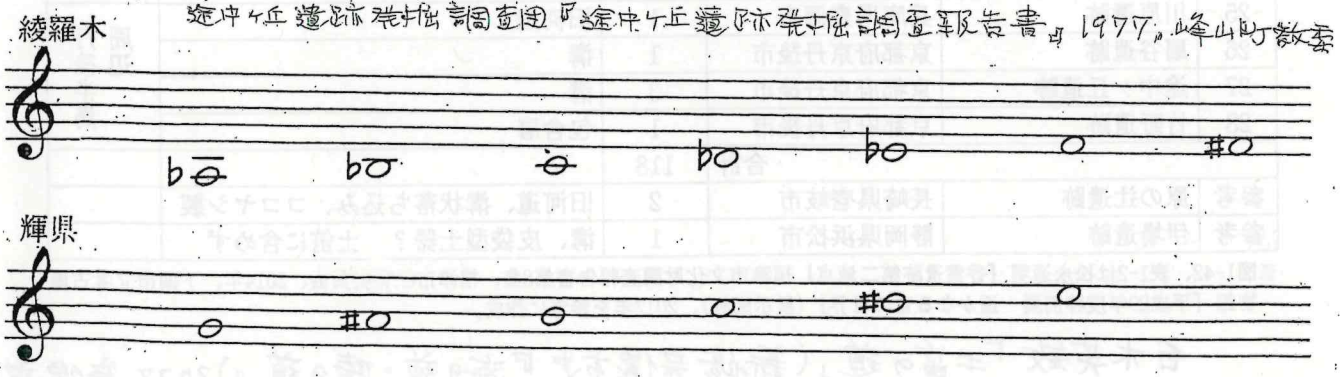
白木英敏「土笛の道」（新修宗像市史『海の道・陸の道』）2022，宗像市



東アジアにおける出土分布図

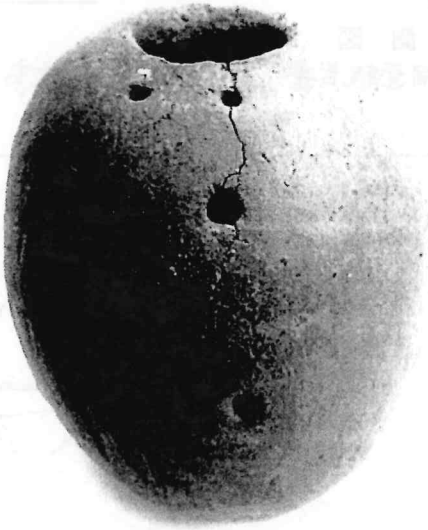


殷代の土笛（『輝県発掘報告』から）

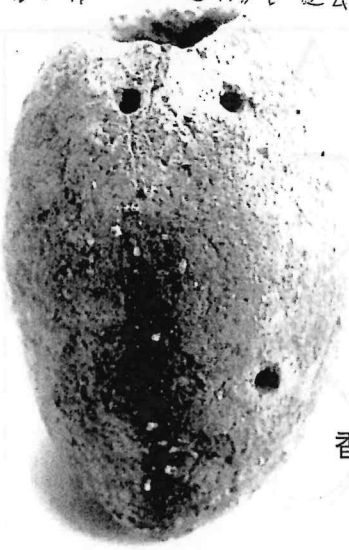


弥生時代の笛の出土分布図

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会『ムナカター祈り・暮らし・交わり』
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究成果与館連携展覧会図録，2020

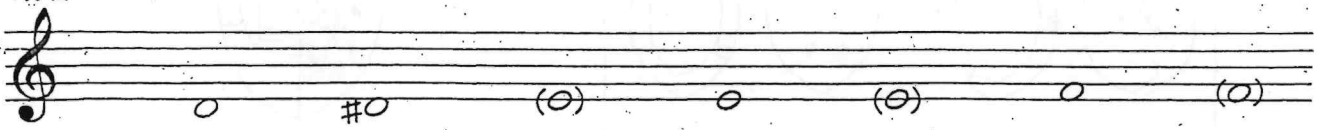


光岡長尾遺跡出土土笛
(宗像市教育委員会)

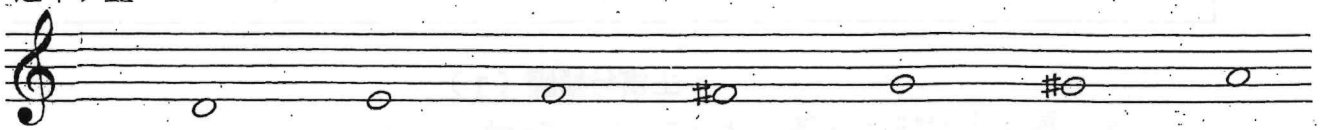


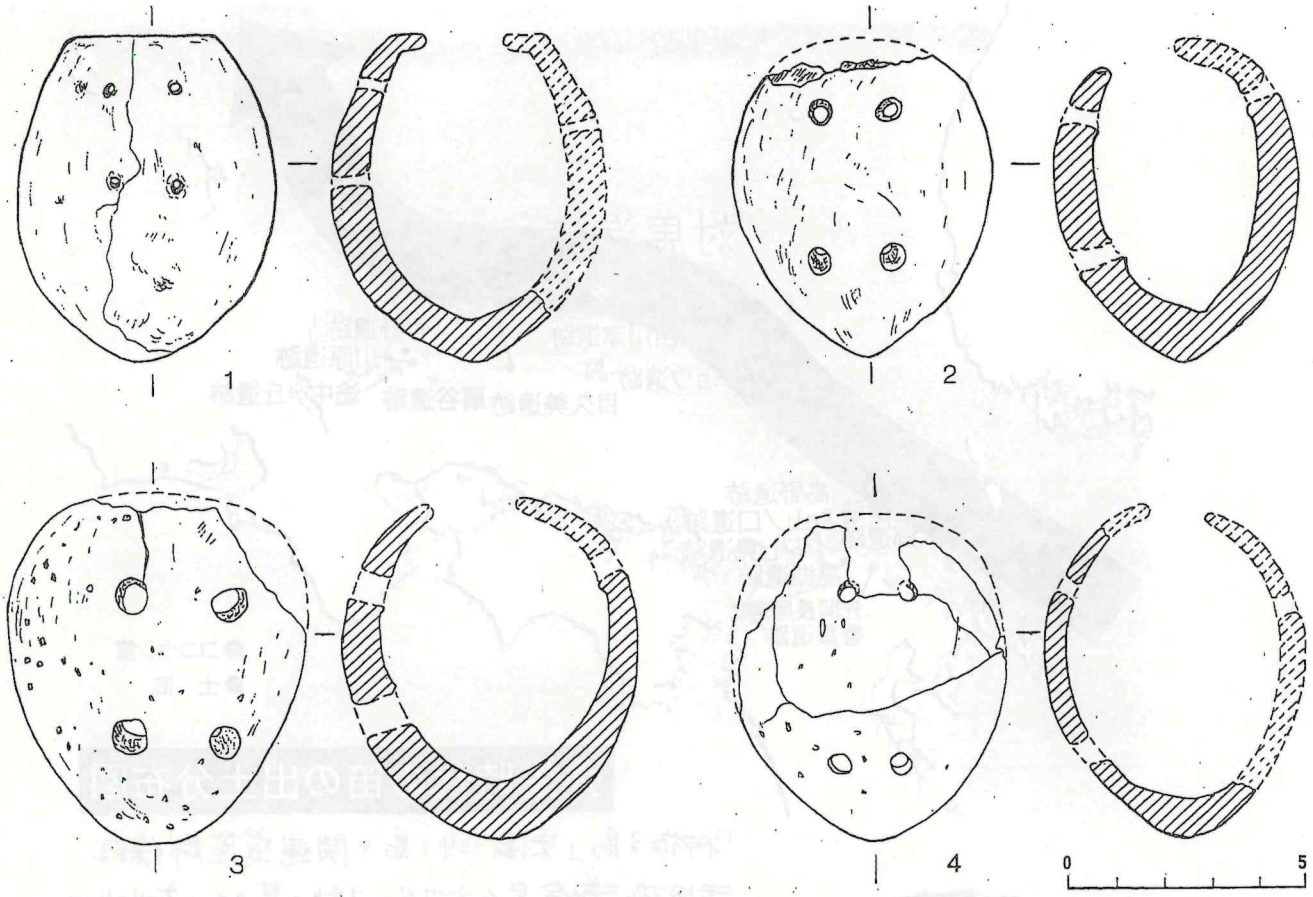
香葉遺跡出土土笛
(福津市教育委員会)

扇谷



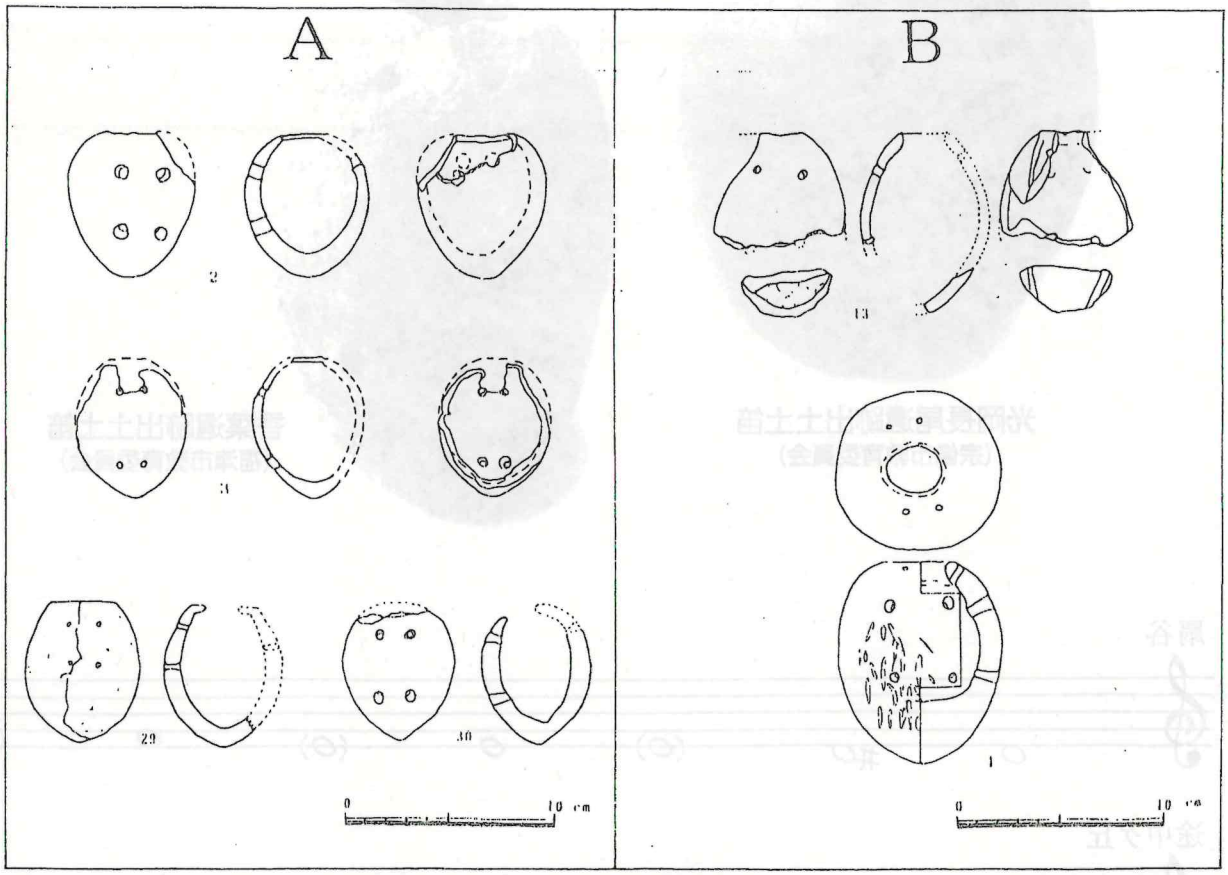
途中ケ丘





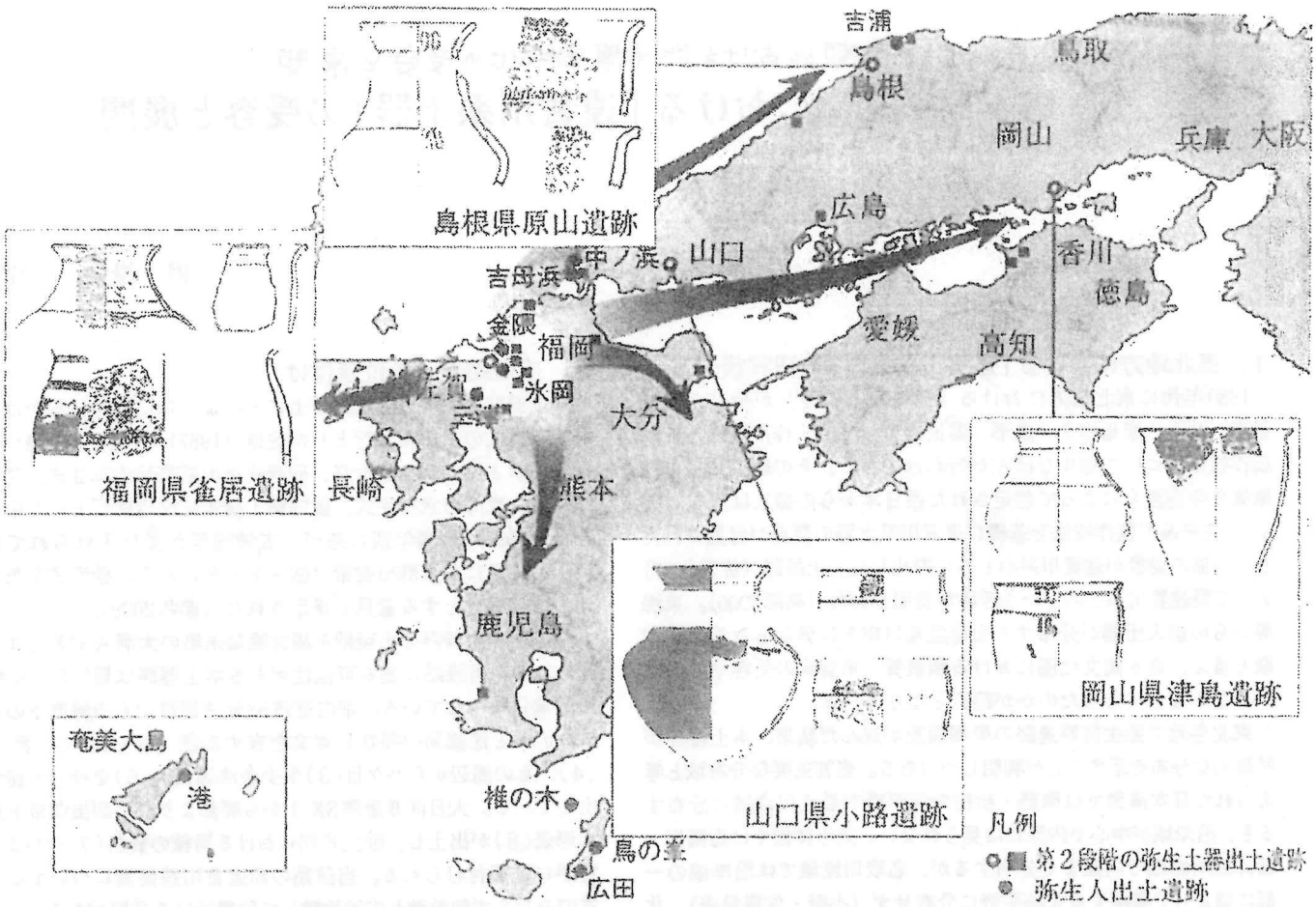
陶 塤 実 測 図

途中ヶ丘遺跡発掘調査団『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』1977，峰山町教育委員会



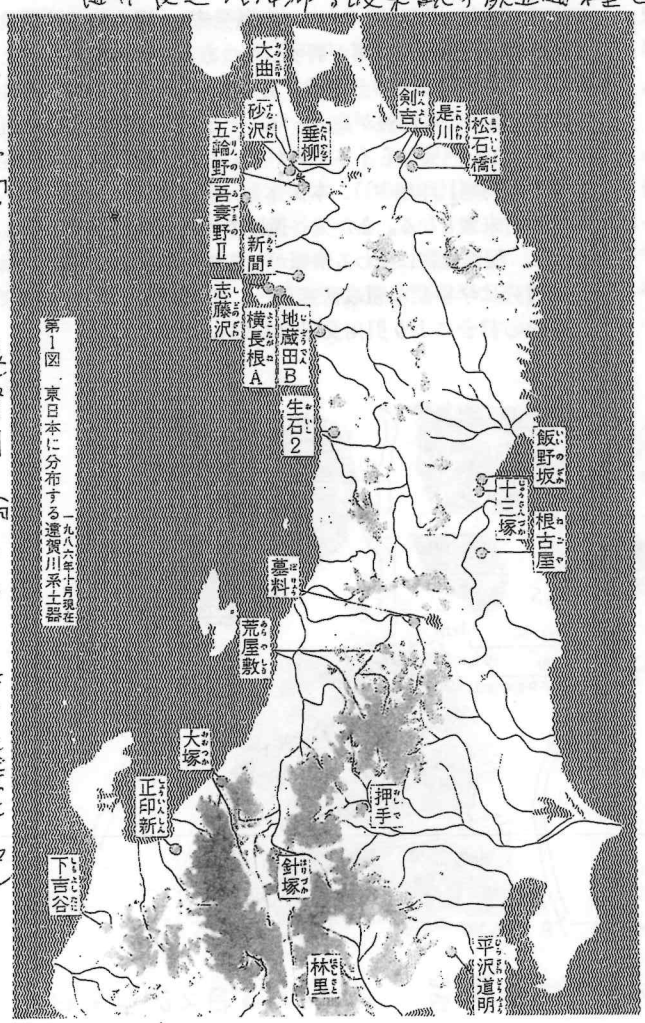
土笛分類図（1）

東山喜一「弥生の土笛―その起源と変遷―」（『古事』〔天理大学考古学研究室紀要〕第4冊）2000，天理大学考古学研究室

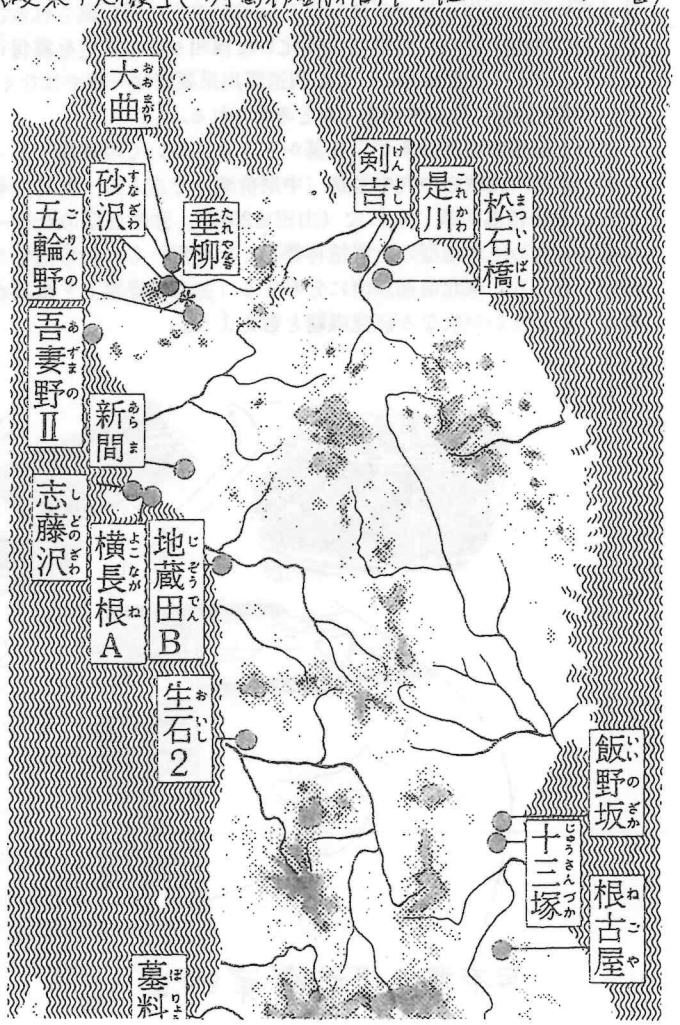


北部九州における弥生文化の伝播

田中良之「いわゆる渡来説の成立過程と渡来の実像」(『列島初期稲作の担い手は誰か』2014、すいれん社)



第1図　東日本に分布する遠賀川系土器　一九八二年十月現在



佐原眞「みちのくの遠賀川」(『東アジアの考古と歴史』中)岡崎敬先生退官記念論集、一九八七、同朋舎出版

セッション3「列島東北部における弥生農耕文化の受容と展開」

(6) 亀ヶ岡文化圏における「遠賀川系土器」の受容と展開

根岸　洋

1．東北地方における「遠賀川系土器」の研究状況

1980年代に東北地方における「遠賀川系土器」が論じられて以来、胎土・素地作り・成形・器面調整・文様・作出技法・焼成製作技術について様々な研究が行われてきた。その結果、当初佐原眞や須藤隆らによって想定された西日本からの搬入は想定し難く、「在来系の製作技法を基礎に遠賀川系土器の要素が付加されたり、一部の要素が遠賀川系のものに変化した」土器群（佐藤2003）として類遠賀川系土器という呼称が提唱された（高瀬2000）。東海等からの搬入土器が分布する会津盆地以南とは異なった地域的特徴と言え、亀ヶ岡文化圏における類遠賀川系要素の受容や展開がいかなるものであったのかが論点となっている。

東北各地で弥生前期遺跡の発掘調査が進んだ結果、本土器群が特徴的な分布を示すことが判明しつつある。当初主要な分布域と考えられた日本海側では津軽・秋田の両平野や最上川流域に分布するも、沿岸域が中心で内陸には見られない。太平洋側では馬淵川・新井田川流域で内陸まで分布するが、名取川流域では沿岸域の一部に留まって隣接する大崎平野に分布せず（小野・佐藤発表）、北上川流域ではほぼ見られない。本土器群は限られた地域で製作・使用された可能性が高い。壺と甕を主体とする器種構成の中で、サイズに応じた作り分けが見られる地域がごく一部に限られるほか、特に秋田平野の大型壺棺に特化した様相もこの推定を裏付けている。つまり東北地方における類遠賀川系要素は一様ではなく、その受容と展開に地域差があったと考えられる。

大型土器棺の埋葬対象が再葬墓かどうかについての議論があったが、馬淵川流域の中穴牛遺跡（中期前葉）で成人骨・乳幼児骨を含む土器棺墓が報じられた（山田他2014）。弥生前期の金田一川遺跡も含めて単棺型の土器棺再葬墓として用いられた可能性が高いと言える。東北南部以南に分布する「弥生再葬墓」と系譜が異なるかどうかが次なる研究課題と言えよう。

2．広域編年上の位置付け

本土器群の出現を広域編年上にどのように位置付けるかは、畿内第Ⅰ様式の中段階併行とした佐原（1987）を皮切りに幾つかの見解が示されてきた。今日、砂沢式を中部高地の氷Ⅱ式、関東の沖Ⅱ式、東海の水神平式、畿内第Ⅰ様式新段階併行とした中沢・丑野（1998）の編年観に基づく広域編年が受け入れられているが、ハケ目による削出突帯（図－7・9）から、砂沢式を第Ⅰ様式中段階併行とする意見も提示された（櫻井2009）。

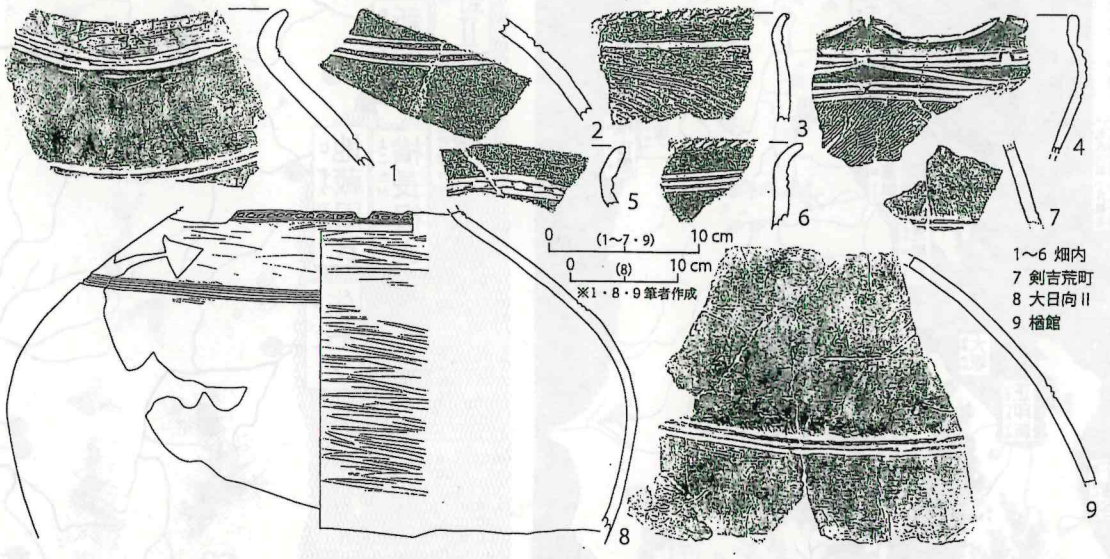
他方、本土器群の出現期を縄文晩期末葉の大洞A'式期とする研究もある。当該期に遡る可能性がある本土器群は馬淵川・新井田川流域に集中している。畑内遺跡53号住居跡から口縁直下の強いヨコナデと沈線間の鎖状列点文を有する壺（図－1）と大洞A'式（4）、その周辺からハケ目（3）や少条沈線（2・6）を持つ土器が出土している。大日向Ⅱ遺跡SX 1から肩部より上に削出突帯を持つ大形壺（8）が出土し、砂沢式期における同種の資料（7・9）よりも古手に位置付けられる。当該期の類遠賀川系要素については東日本のみならず他地域と広域比較して位置付ける必要がある。

3．農耕との関わり

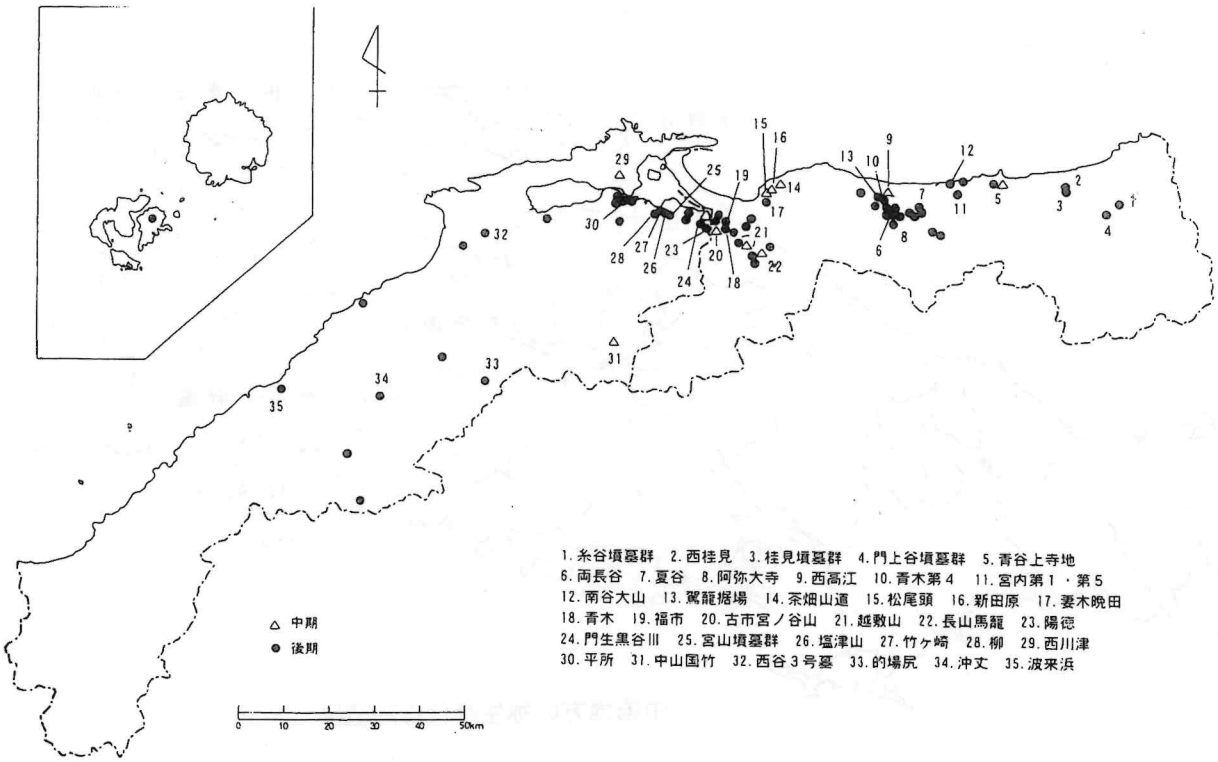
レプリカ法による土器圧痕の研究の結果、東北地方におけるイネの出現は砂沢式期以降であり（高瀬発表）、縄文時代晩期後半にも雑穀がほぼ見られない事が判明しつつある。弥生前期の本土器群の分布は稲作関連遺物の分布域と重なり、本土器群が稲作農耕の受容と密接に関わる可能性が高まった。一方、畑内遺跡53号住居出土の壺（図－1）内面からイネ圧痕が報じられ（設楽編『東日本穀物栽培期の諸問題』(印刷中)）、本個体を大洞A'式期と見ればイネの出現期は晩期末葉となる。また荒谷遺跡では抉入柱状片刃石斧と石鎌が出土し、稲作農耕に関わる情報がいち早く受容された蓋然性が高い。

本研究は学術変革領域研究（A）、20H05814の研究成果である。

頁数の都合により引用文献は割愛した。



日本考古学協会第88回総会　研究発表要旨　2022年5月28・29日
於　早稲田大学

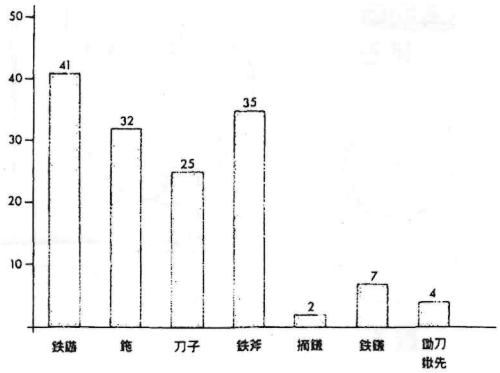


山陰における弥生時代鉄器出土遺跡分布図（田中1999から作成、一部改変）

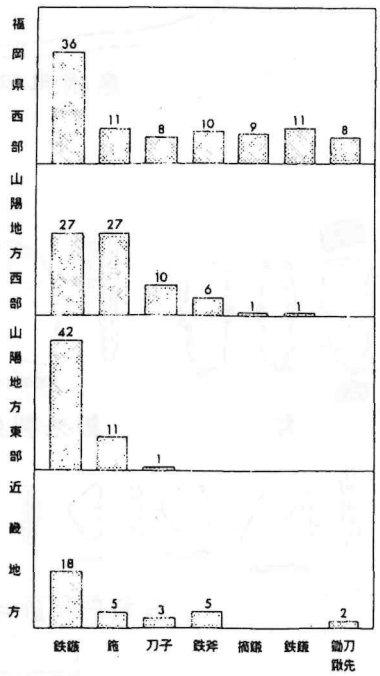
表　妻木晩田遺跡の地区別・時代別弥生鉄器一覧（村上2000a）

	〈松尾頭地区〉					〈妻木山地区〉					〈妻木新山地区〉					〈洞ノ原地区〉					〈松尾城地区〉				
	弥生中期	弥生後期				弥生中期	弥生後期				弥生中期	弥生後期				弥生中期	弥生後期				弥生中期	弥生後期			
	後半	前葉	中葉	後葉	末葉	後半	前葉	中葉	後葉	末葉	後半	前葉	中葉	後葉	末葉	後半	前葉	中葉	後葉	末葉	後半	前葉	中葉	後葉	末葉
袋状斧				2	1		1	1		3			2										1		1
板状斧										2															
鉇			4	5	3			2	4	12		3	2	1	1										2
刀子			1	1	1		1	1		4															
鑿			1		1				1	2		1								1					
穿孔具			3	2	2					7		1			1										
鏃										4															
勘散先			1	1						2															
鎌														2	1										
掘鍬										1															
棒状				4				1	2	9		3	1		3										
板状		1	5	7	4			3	4	12		1			4					1					1
鉄塊														1											
端切				1				1		2															
その他			2	6	1				2	9		3	1												
備考	※時期不明1点あり。					※遺構外出土の、時期不明鏃1点あり。																			

〈仙谷地区〉　1点（後期中葉・無基族）



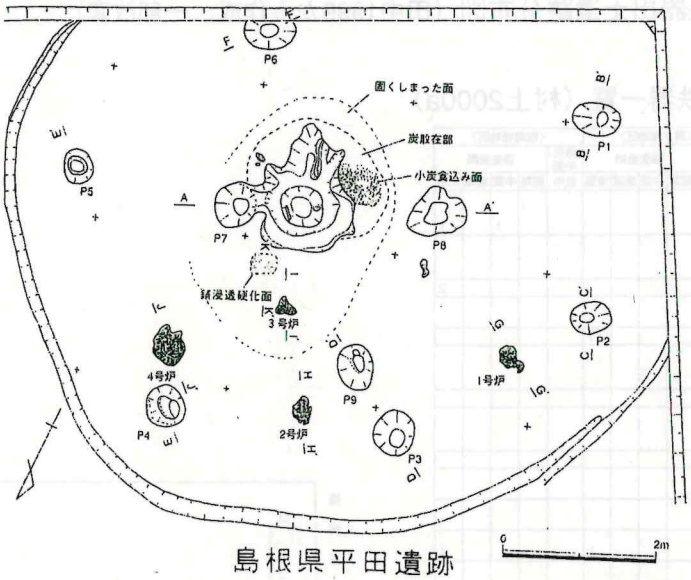
山陰における弥生時代鉄器器種別出土数（池淵1998）



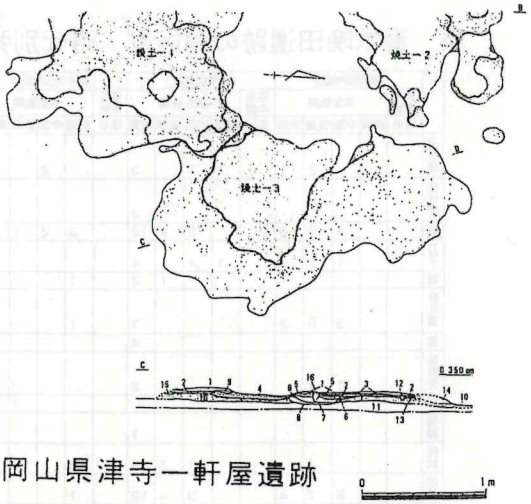
西日本における弥生時代鉄器器種別出土数
（野島永氏作成図をもとに池淵氏作成　池淵1998）

高尾浩司「青谷上寺地遺跡と妻木晩田遺跡―絢爛豪華な鉄器文化―」
日韓合同鉄器文化シンポジウム（前掲書）

中国地方の弥生時代鍛冶遺跡

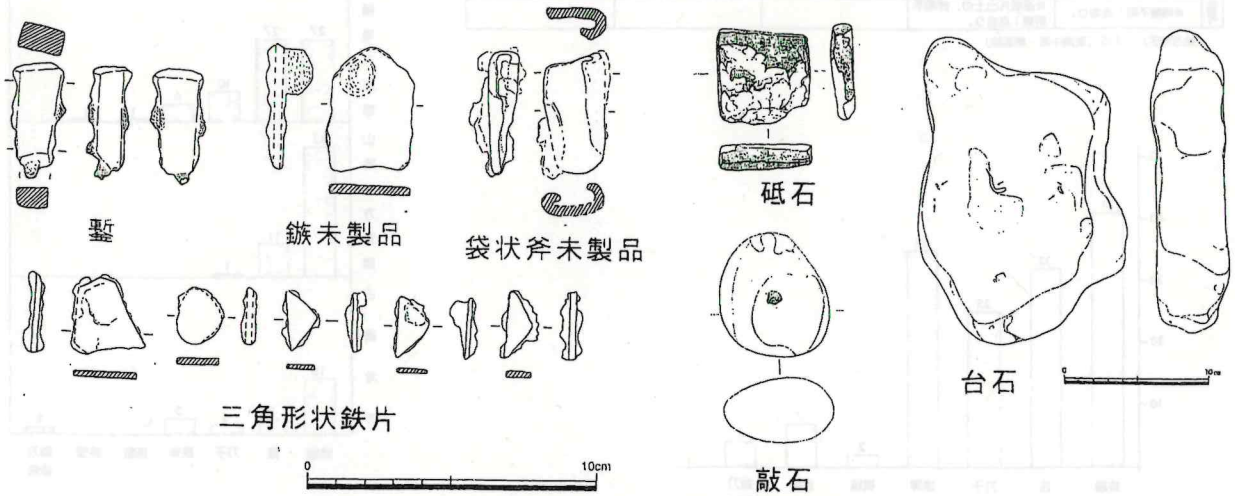


島根県平田遺跡



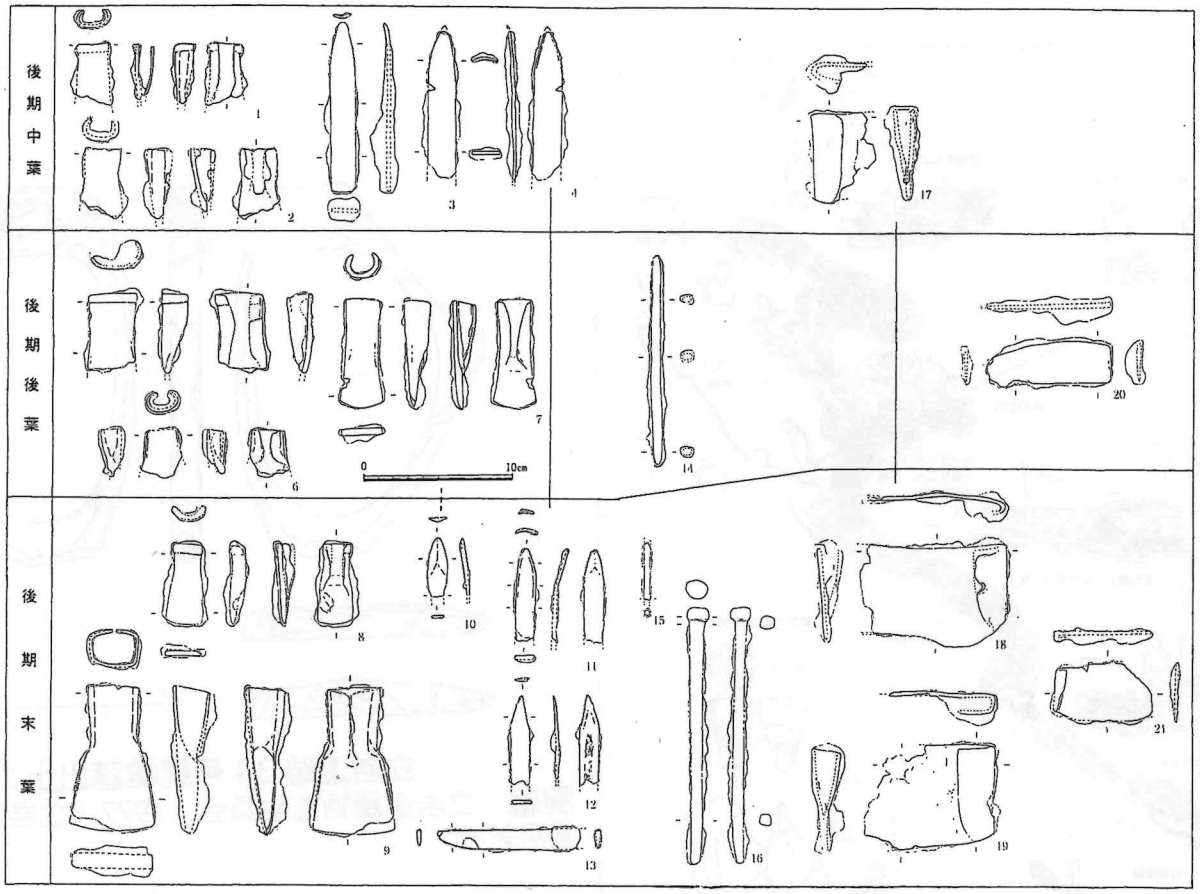
岡山県津寺一軒屋遺跡

弥生時代の鍛冶遺構

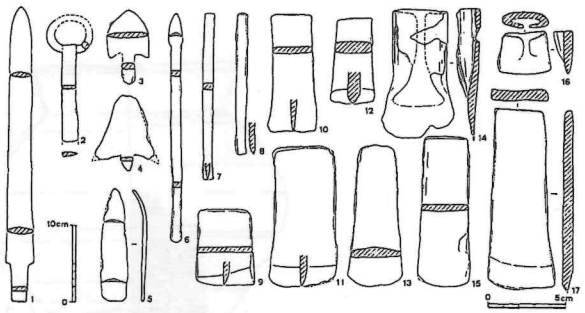


平田遺跡出土の鍛冶関連遺物

角田徳幸「弥生から平安時代の製鉄遺跡・鍛冶遺跡—中国地方を中心として—」日韓合同鉄器文化シンポジウム『日本海（東海）がつなぐ鉄の文化』2001，鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会

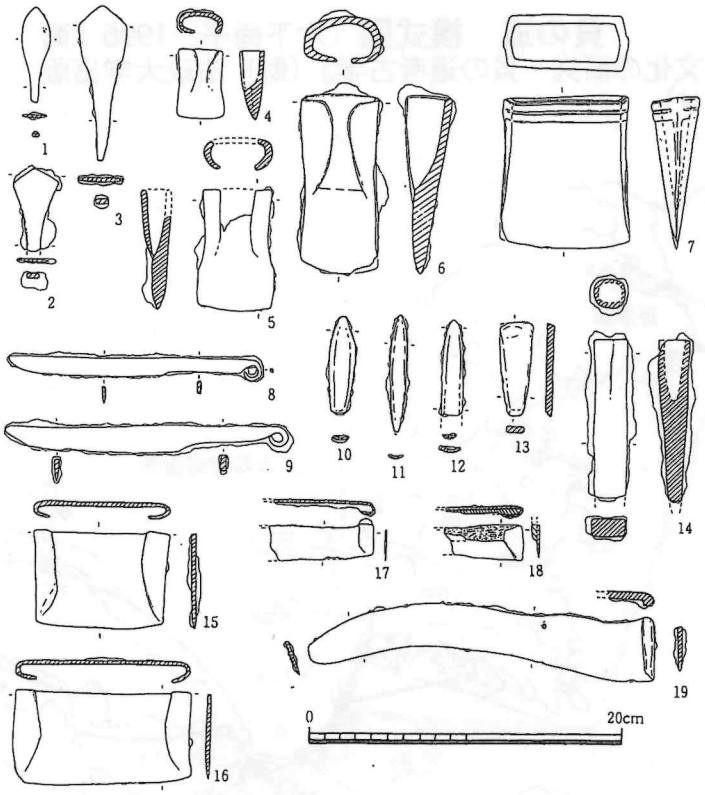


妻木晩田遺跡出土鉄器の変遷（村上2001を一部改変）

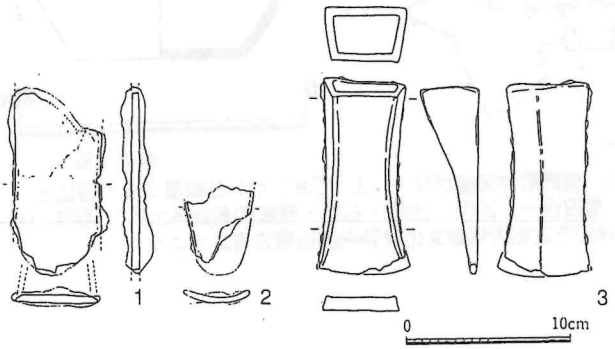


1；綾喜郡田辺町　田辺　方形台状墓(後期)
2；大阪市　崇禅寺　土坑(庄内式期)
3；枚方市　出屋敷　3号住居(後期後葉)
4；河内長野市　大師山　2号住居(後期後半)
5；八尾市　亀井　SE2402(中期後葉)
6；城陽市　芝ヶ原12号墳(庄内式期)
7；八尾市　亀井　SD3067(後期後半)
8；八尾市　亀井・城山　第IX層(後期か)
9；三田市　奈カリ与　BH59(中期後葉)
10；神埼郡神埼町　福本　B-4住居(中期後葉)
11；八尾市　亀井・城山　SD3036(後期初頭)
12；高槻市　古曽部　住居(後期初頭)
13；八尾市　亀井　SR3001(後期後葉)
14；八尾市　亀井　SD11(後期後半)
15；宇陀郡榛原町　大王山　12地点住居(後期初頭)
16；奈良市　六条山　流路(後期後半)
17；長岡京市　谷山　SH23703(後期後半)

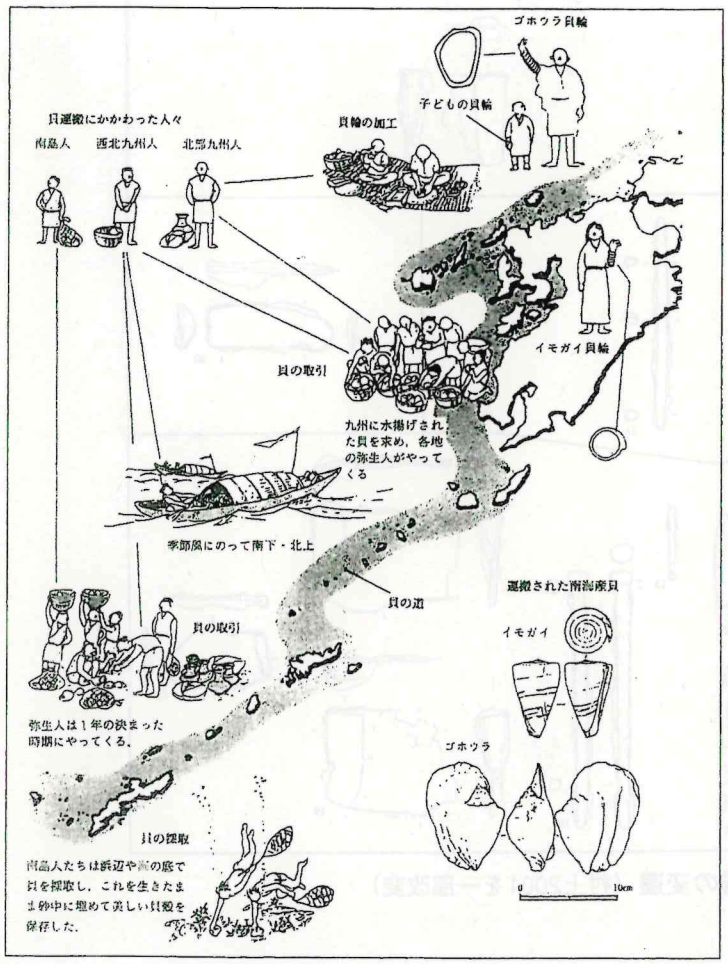
近畿地方中部の弥生時代鉄器（野島1996）



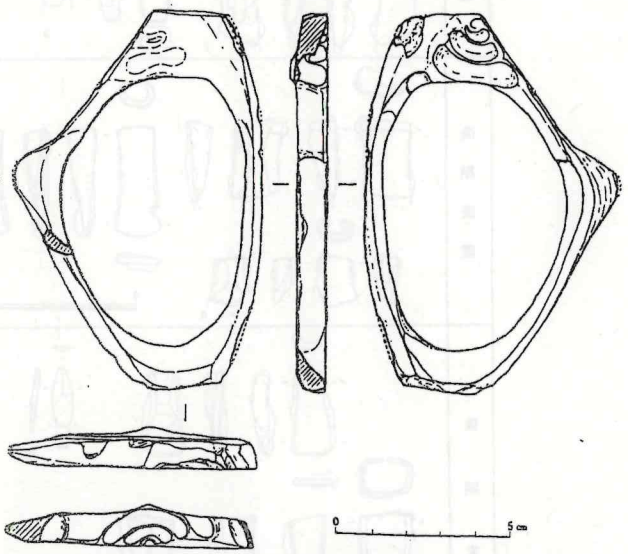
佐賀県吉野ヶ里遺跡における鉄器組成
（弥生時代後期後半　村上1998）



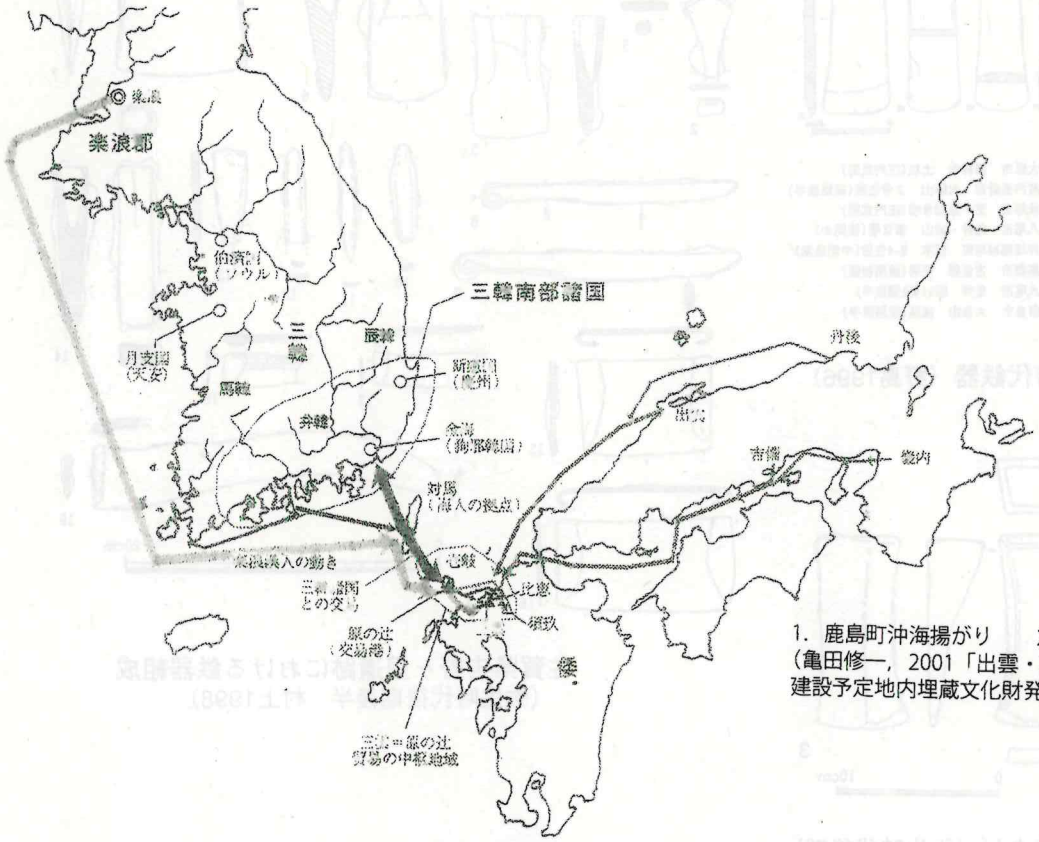
日本海沿岸地域出土の鋳・鍛造タビ（弥生時代後期）
1、2妻木晩田遺跡　3兵庫県大平遺跡



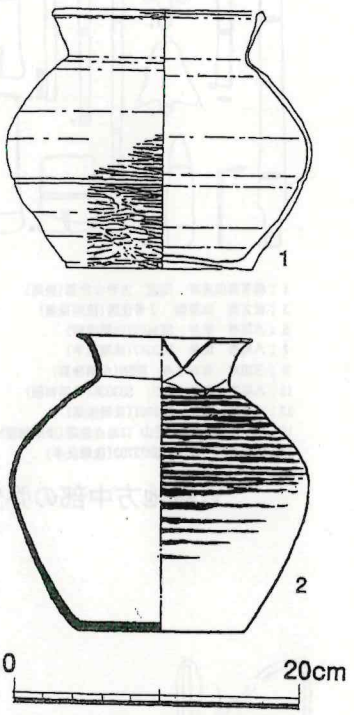
貝の道　模式図（木下尚子、1996『南島貝文化の研究・貝の道考古学』（財）法政大学出版局より）



立岩遺跡 34 号甕棺墓出土ゴホウラ製腕輪（立岩遺蹟調査委員会、1977『立岩遺蹟』河出書房新社）



原の辻＝三雲貿易の様相



楽浪土器

1．鹿島町沖海揚がり　2．ピョンヤン石厳里 205 号墓出土（亀田修一，2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』XIIより）

1 鰐石
（弥生前期～中期初頭）
2 矢野
（弥生前期～中期初頭）
3 西川津
（特定できない）
4 青谷上寺地
（弥生前期）
5 松原田中
（弥生前期）
6 扇谷
（弥生前期～中期初頭か）
7 八日市地方
（弥生前期末～中期初頭）

図 6　層灰岩製片刃石斧の分布
（佐藤・宮田 2018 ならびに森 2013 をもとに作成）

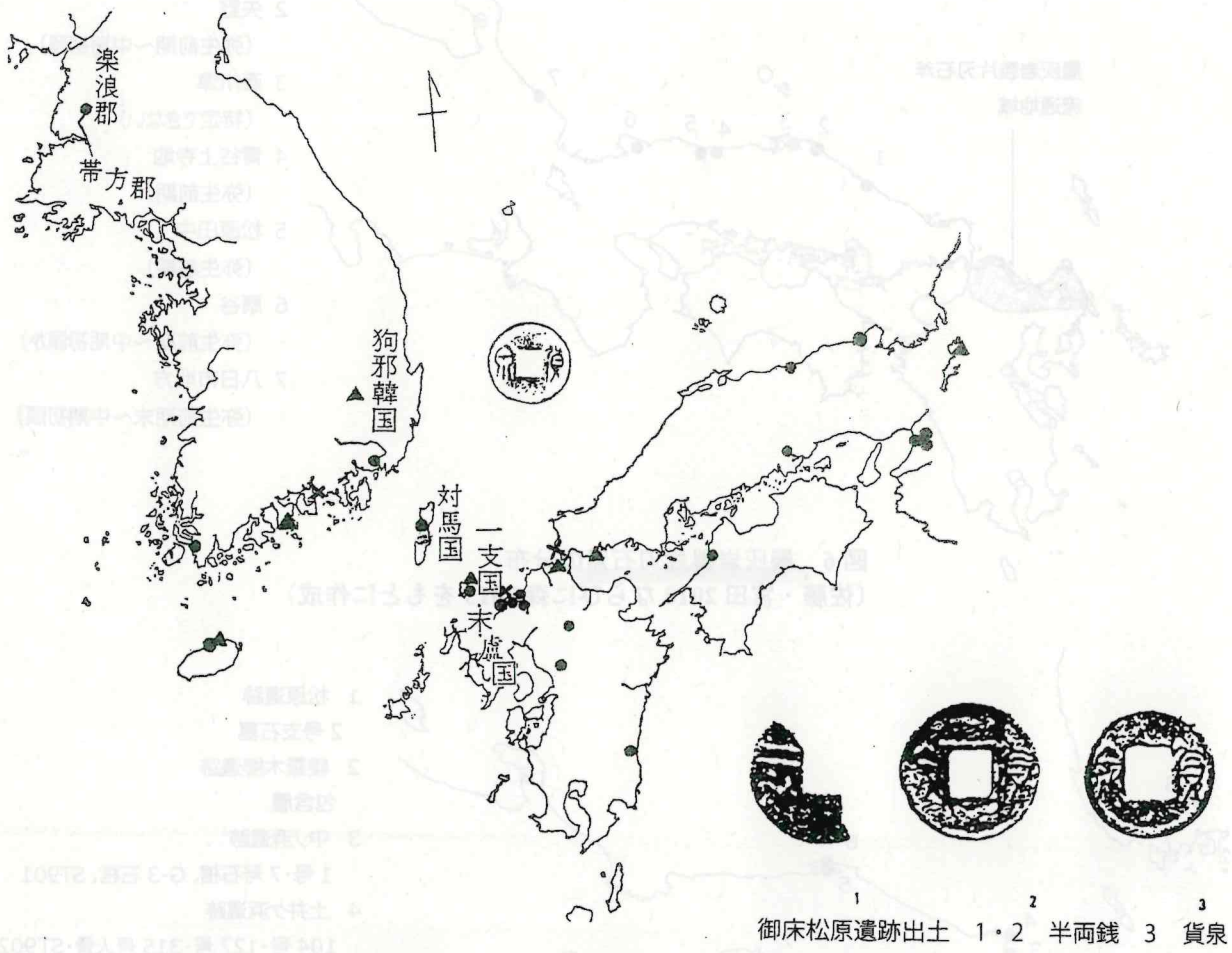
1　松原遺跡
2 号支石墓
2　綾羅木郷遺跡
包含層
3　中ノ浜遺跡
1 号･7 号石棺、G-3 石棺、ST901
4　土井ケ浜遺跡
104 号･127 号･315 号人骨･ST902 ほか
5　西川津遺跡
包含層
6　古浦遺跡
28 号･29 号･30 号･31 号･32 号･34 号人骨
7　南方遺跡
包含層
8　玉房遺跡（韓半島　無文土器中期）
貝珠製作地

図 8　貝珠出土地の分布
（弥生前期～中期）

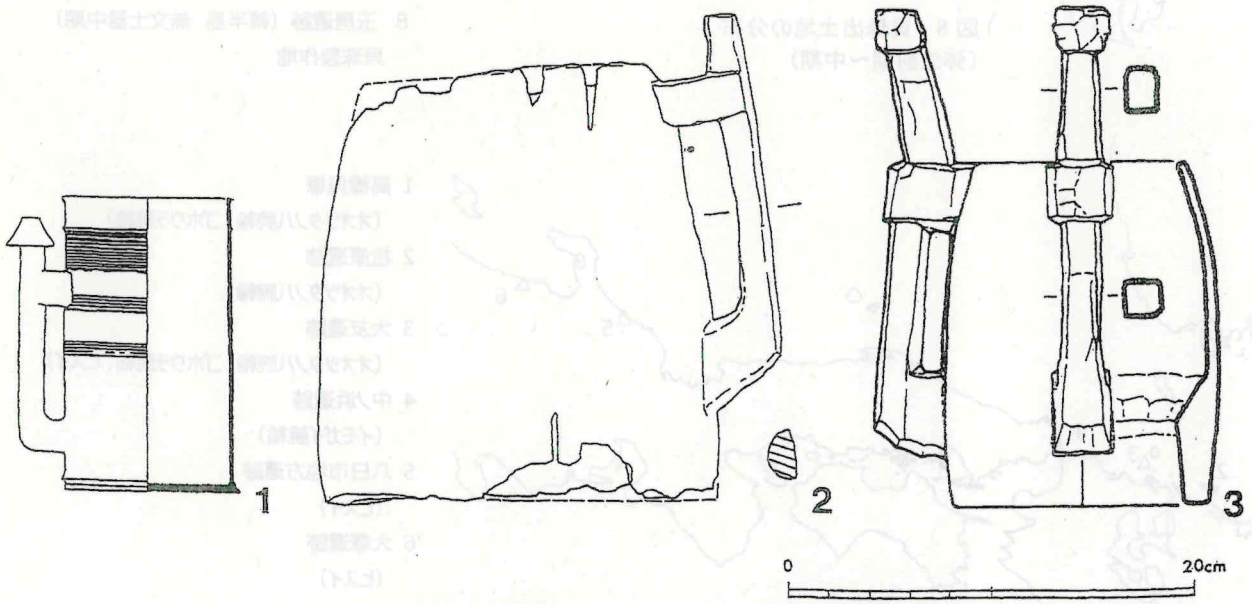
1 高橋貝塚
（オオツタノハ腕輪、ゴホウラ腕輪）
2 松原遺跡
（オオツタノハ腕輪）
3 大友遺跡
（オオツタノハ腕輪、ゴホウラ腕輪、ヒスイ）
4 中ノ浜遺跡
（イモガイ腕輪）
5 八日市地方遺跡
（ヒスイ）
6 大塚遺跡
（ヒスイ）

図 9　弥生前期の遺物の分布
●　琉球列島産貝殻の腕輪
△ 三角錐状ヒスイ（前期）

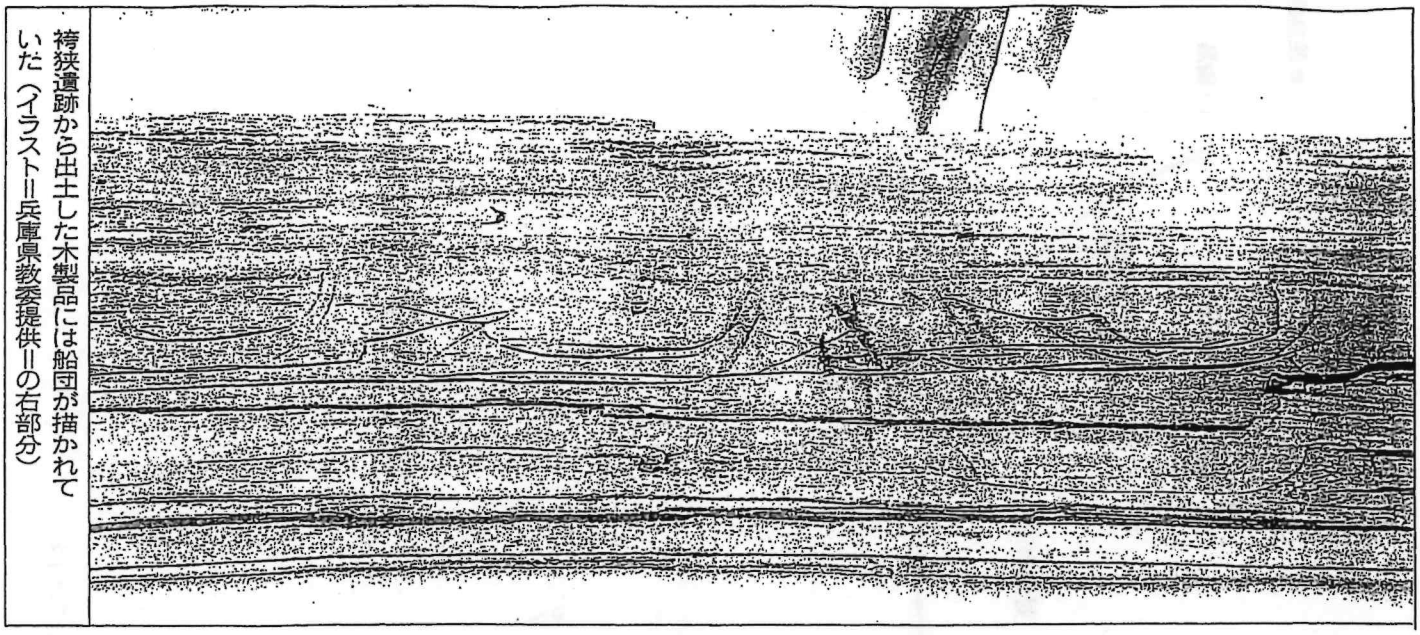
木下尚子「弥生管玉・勾玉と北陸―九州からの視点」
『北陸と世界の考古学：日本考古学協会2021年度金沢大会資料集，2021



貨泉（●）五銖銭（▲）半両銭（×）出土分布図
（佐伯有清ほか、1976『邪馬台国のすべて』朝日新聞社より一部加筆）



楽浪墳墓と日本出土のジョッキ形容器
1．漆器・貞柏里 135 号墓出土　2．木器・島根県姫原西遺跡出土　3．木器・石川県猫橋遺跡出土（鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会，2001『日本海（東海）がつなぐ鉄の文化』より）



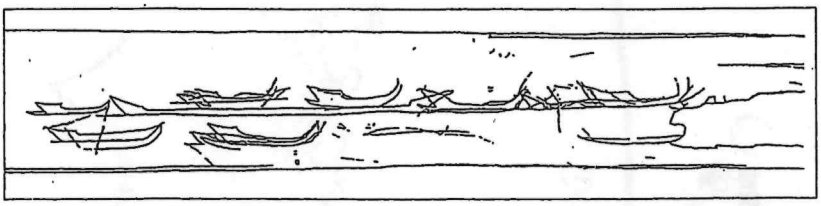
袴狭遺跡から出土した木製品には船団が描かれていた（イラスト＝兵庫県教委提供＝の右部分）

準構造船団の線刻画

木製品に15隻描写

兵庫・出石町
袴狭遺跡

2000.5.31（産経）

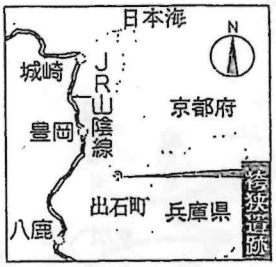


古墳期、但馬の大勢力が日本海往来？

兵庫県出石町にある袴狭遺跡の古墳時代前期（四世紀初め）の地層から出土した木製品に、丸木舟に板を継ぎ足して背を高くした「準構造船」の船団十五隻が線刻画で描かれていた、と三十日、同県教委が発表した。外洋も航行できる準構造船の船団図の出土品は国内で初めて。当時の但馬地方に、日本海を行き来した大勢力が存在したことを裏付け、大陸との交流をうかがわせる貴重な資料とみられる。

有力首長か渡来集団

門脇禎二・京都府立大名誉教授（古代史）の話　但馬地域の有力首長か、大陸（朝鮮半島）から渡来した集団の船団と考えられる。大型船を中心にした船団は航海中の戦闘隊形にもみえ、集団の階層をうかがわせる。何か記念すべき航海を描いたものと考えられる。



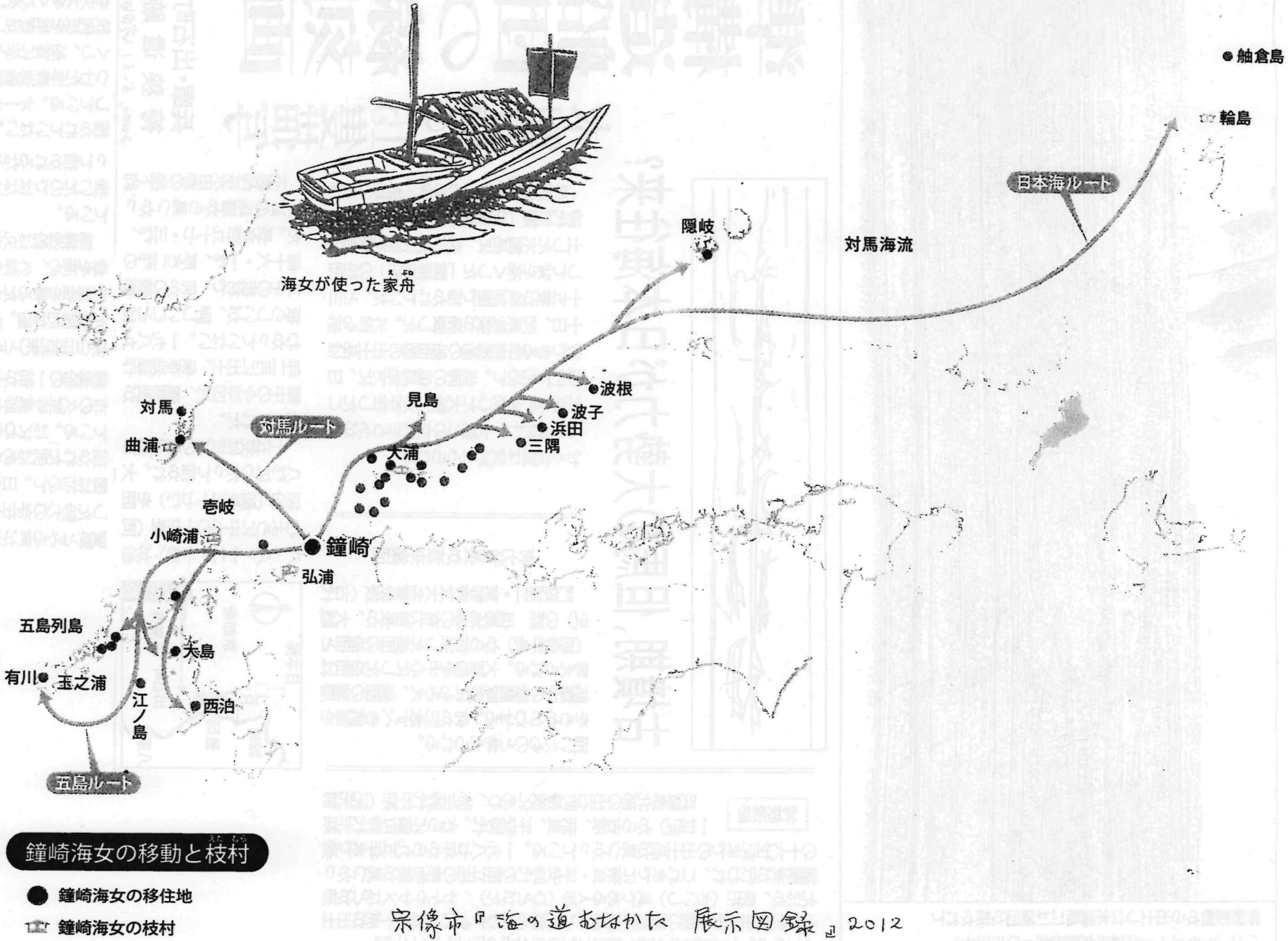
木製品は水田跡の地下約二㍍の地層から見つかった。長さ百九十七・三㌢、幅十六・一㌢、厚さ二㌢のスギの板材で、何かの装飾板らしいが、詳しいことはわかっていない。一九八九年二月に出土、保存処理作業中の今年四月、線刻画が発見された。

十五隻は板材の長さ約百八㌢にわたって描かれ、大型船（船長三十七㌢）を囲むように中小の十四隻（同八・八―十二・七㌢）が船団を形成している。いずれも丸太をくりぬいた船底に舷側板を継ぎ足して背を高くし、船首に波よけの板をつけた準構造船特有の形をしている。オールや人物は描かれていない。船が重なって描かれるなど、一度に描いたのではないとみられている。

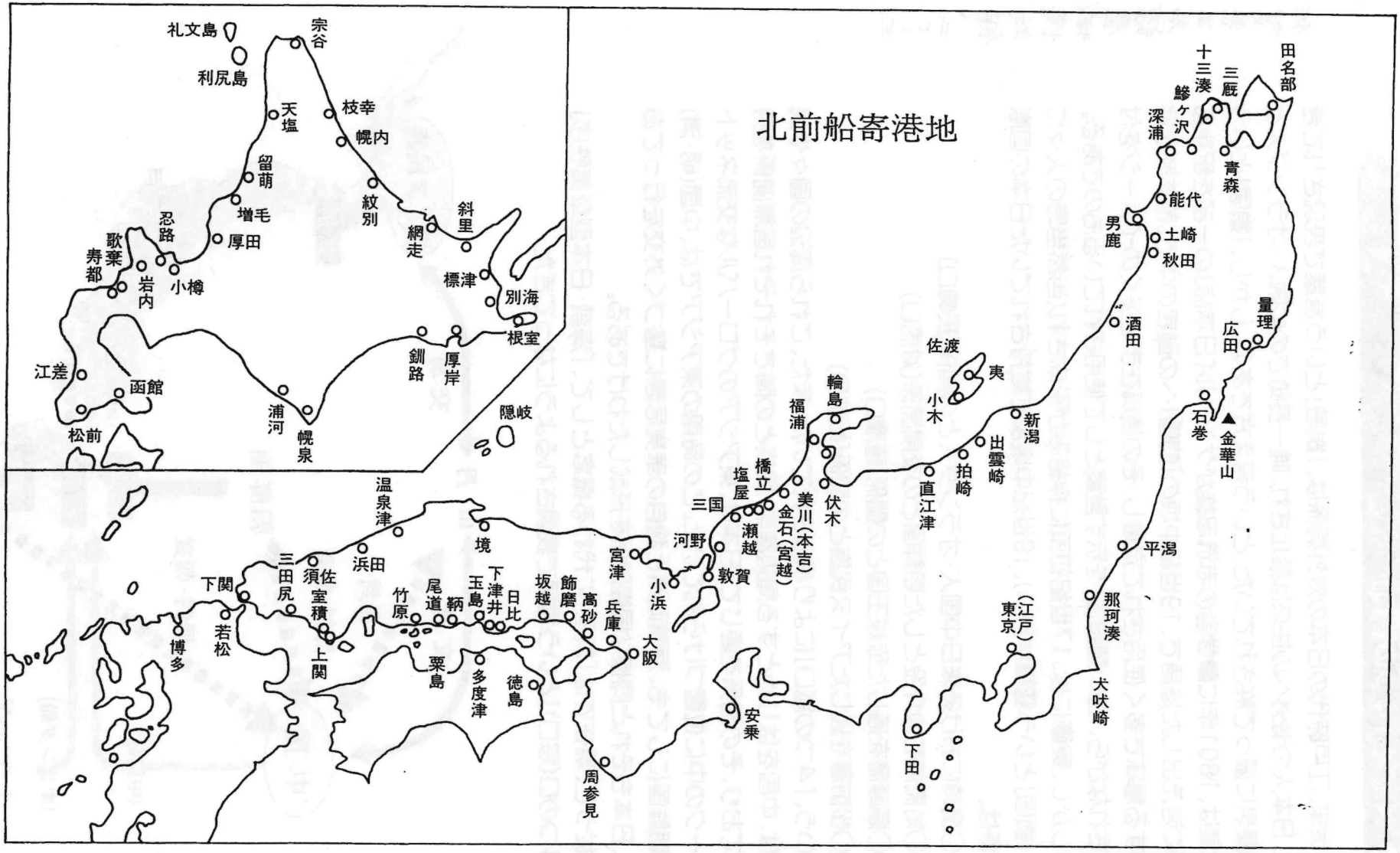
準構造船は丸木舟の積載量を高め、外洋を航行する安定性を得るために補強した過渡的な船。弥生時代末期（三世紀末）とみられる準構造船の一部が大阪府八尾市の久宝寺遺跡から出土している。はにわや土器にも描かれた例はあるが、船団図は初めて。日本海を航行した勢力の存在を裏付ける資料とみる声が出ている。

袴狭遺跡

兵庫県北部の出石町袴狭にあり、弥生時代中期（紀元前一世紀）から古墳、奈良、平安時代、さらに室町時代末期の十六世紀までの出土品が見つかっている。一九八七年から九五年まで発掘調査が行われ、これまでに奈良・平安時代の掘立柱の建物跡が見つかったほか、祭祀（さいし）具である人形（ひとがた）、サケやサメなどが描かれた弥生時代後期の箱形木製品など木製品だけでも約一万五千点が出土している。それ以外の土器、銅印などの出土品も約二千点に上る。



宗像市『海の道むなかた 展示図録』2012



福井県立博物館，1985『第2回特別展 北前船と越前・若狭』

「北前船の時代」(教育社) より

●「鎖国」と「4つの窓口」

従来、江戸時代の日本の対外関係は、「鎖国」という言葉で表現されてきた。日本人の海外への往来は禁止され、唯一長崎での中国人・オランダ人との貿易に限って許されていた、という考え方である。しかし、「鎖国」という言葉は、1801年に蘭学者の志筑忠雄がケンペル『日本誌』の一部を訳する際に考え出した造語で、19世紀中頃の「開国」への動きの中で、前体制を批判する意味で多く使用されて定着し、その後現在まで多くのイメージを付加されながら、「強い閉鎖性」を示す言葉として使用されているものである。

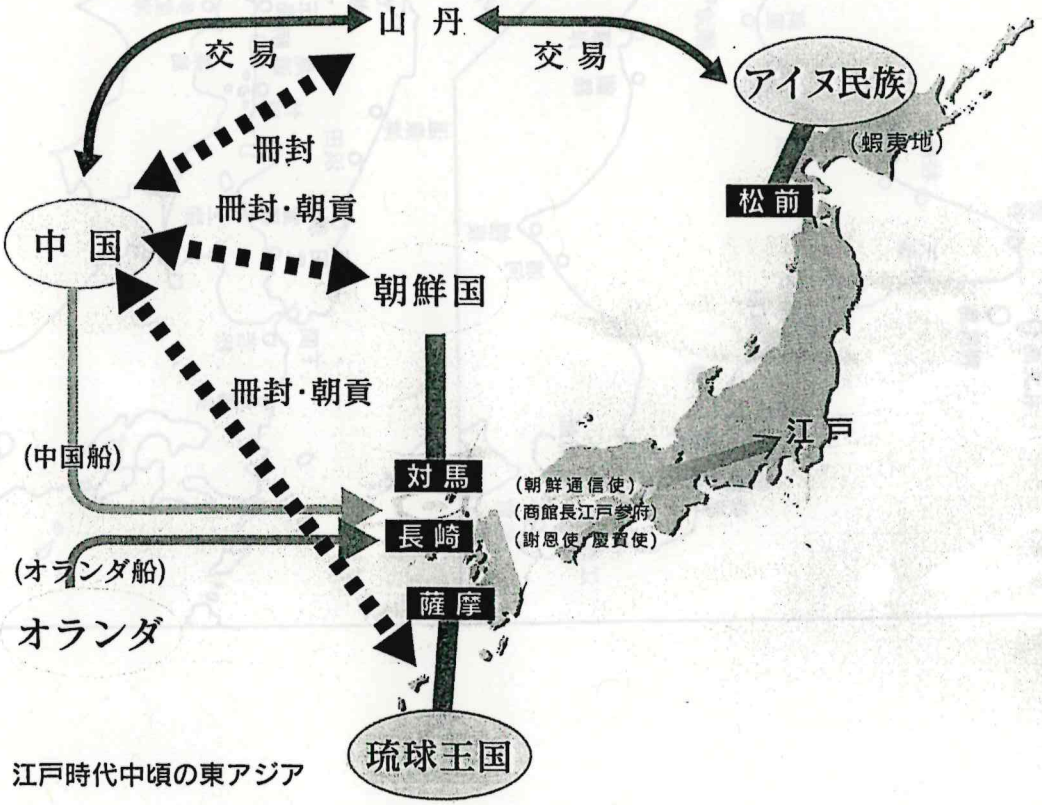
しかし、実際には、17世紀初頭に枠組みが形成され(当然当時の人々には「鎖国」という認識は無い)、19世紀中頃まで維持されていた日本の国際関係は、

○長崎における来日中国人・オランダ人との関係(長崎口)
○対馬藩を仲介役とした朝鮮国との交隣関係(対馬口)
○薩摩藩を通じた琉球王国との関係(薩摩口)
○松前藩を通じたアイヌ民族との関係(松前口)

という、「4つの窓口」により構成されていた。また、これら周辺の国々や民族は、中国をはじめとする周辺諸国・民族との間でそれぞれ国際関係を持っており、その関係を通じて、日本は、東アジアのグローバルな交流ネットワークの中に位置づけられていた。この時期の東アジアでは、中国(明・清)や朝鮮国にしても、海禁政策と独自の華夷思想に基づく外交を行っており、日本もそれと同様な国際関係を形成したわけである。

従って、現在では「鎖国」に代わる概念として、「海禁・日本型華夷秩序」「4つの口(窓口)」という言葉で表現されるようになってきた。

『4つの窓と釜山―東アジアの中の日韓交流―』
開館10周年記念特別企画展
佐賀県立名護屋城博物館、2003



江戸時代中頃の東アジア